『椿説弓張月』拾遺三

鎮西八郎為朝外傳　椿説弓張月拾遺　巻之三

東都　曲亭主人編次

第五十一回

南風原城に入て妖婦利勇を惑す
佳奇呂麻より起て漁師王女を迎ふ

鎮西八郎為朝は群嶽の麓なれ。山神廟あり。散銭擺を打開き
まつるに。ひとりの美女。擺の中よりあらはれ出る。その形勢。いと
怪しかりければ。走り避んとせしに。縁由ありとて。女ふい
いたく怕れ。まことに「ものいひ」が行はれ。回答をあらはして。
ふしぎなりとぞ。此山の北邊なる。保似村の村正某甲が女兒にて。名
を海棠といへり。いわる秋。采女司ふとみとられて。首里の王城へ
まゐるべし。ふたりぶざれ都城の騒動。浪風もくわ世となりて。えもふ

椿山文庫
関大学
図書館蔵

らどるのりし幸ひさ。只いとづふに蟲とる折ふしとの境方ゐ曙雲國所の大ゐ
ゐ全廣といふ猛者が。駿の軍兵を領く。つぶれよ乱且入り。老くる弱き差
別ゐ。鑿は仕る行くゐ。つふいが親同胞も。ゐく事と隕せ。つぶ身
を及の下に潜りて。ふーぎ。不思議よ脱れ去ゐれど。ゐ不追撃ることとりや。
とらくが悲〳〵おそ〳〵しく。ゐの古廣ゐ走り入り。ゆくかくろひ侍り
なり。ゐん身も又曙雲法王の筑登之ゐて。罪ゐれりの代敵殺〳〵快と
志ゐるで。今へ命に惜むよりひは。勲よ顕名の世よ存今とらくぐくの。
憂をこるめの涙の磯ゐ。ゐまとなれども乾うね袖ハ浮む瀬もなれ数
なり。り又首里の兵士ゐるで。南風原の親方の恩顧の人ゐとるゐ
で。りろもゐこのは。に祈まうして國の為つぶ身の為ゐ親同胞の寃を
雪ぐ。ゐひ孫。といひうけてよるこ泣声ハ友よ離れ浦ゐ鳥さんてこ赤

餘吾の松よ羽衣を掛失ハ。天津少女よ彷彿とり為朝をけくと。
緯の来歴を笑て眉うち顰不語れハ曙雲が兵士ゐ。日本國
より漂着せし為朝と呼るゐ。近畿南風原ゐ弓を倚れで汝
ぐ寃苦を訴ゐさせん。さハあれ力及ずとも親同胞の枉死をこ捨ていひ
がひゐも脱ま去りしハ孝節両ゐ。ゐるゐ而ゐれど教ゐた女流のうく
ゐ。ふく咎ひるこれゐ。そふゐうなれば。南風ゐくおてゆくぎ。とく
この櫃よ入れしと宜へば。海棠を世ゐ憑ゐ。おもちして流る流とうて
拭ひ。数回ふー拜ころり。ゆくて為朝ハ海棠ゐ舊のごとく。散銭櫃ゐ
潜ゐて就るとゐ然の改をも。その中へ投入れ楚と蓋ゐてこれを脊負ひ南風ゐ
を投こゆりゐへ。その日もとゐく傾きぬ。この朝大臣利勇ハ四門と成る
筑登之ゐ下知ゐ為朝既よ。三日の約ゐ乖なてかくり来ぐ。ゐや今日ゐ

及びて立うへ[illegible]も決して城中へ入れそ汝ホり由断して門内へ入ること
あるべ軍法をりて罪さべしといと厳重ま命ぜーべ衆皆うけあうへく。
正門後門の番卒を増加えとれを守ること寝を御ぐに異なべ。かくこと
ちべ為朝ハ散銭櫃を脊負ひつ。城ホ入ーんとしるへい番卒ホ遠ーく
手ホく捍棒を打あして遮さべめ。ホれ為朝汝既ホ三日の約ホ乖き
なべ。阿容ーくと怒りまる。面の皮こそいと厚ー。吾們親方の仰を稟
たり。今ハ一足も入ーくこと叶ハぢ。命をーくハ銷ても失ま幸ホ。その首と全
さべたホと罵れば為朝ホもあくさ大ホ怒り。小さ[illegible]ホ燕雀の共
怒り。汝ホが為る所ホあべ。それおのづ[illegible]処分あり。妨をるといホまき
て逆茂木のごく左右より。うち合ーくホ捍棒を足りて丁と拂ひ退け。
進こ入ーんとしるへば。ホハ狼藉なり。このくめれて。含まる棒を閃ひし群ホ

て打ーく蒐る。ホ為朝ホ。夏の雨より多い繁く。頭の上へ
打かくホ捍棒長鎌鎗尾の槍ホ飛ぶ。やと引よ。あるいハ踏折り掻生
捨ハ。ひき郷をゆくごく。百歩ホまりぞ入りまふ。二の城戸をホ[illegible]
ホ。その形勢ホ[illegible]て舌を巻ホ入れ立てかるにとて門扉を礙と須ーたり。
當下為朝ハ。さるくと歩こよりて。散櫃を負ひ。るまく。二の城戸ホ
手をかけて一声高く推ーるへば関木やりく。と中より折れて。城戸ハ左
右へ開と開く。その膂力鴻門ホ沛公を救ひ。るる樊噲ホいやましられど。
ほとり近き兵士ホそ。ひくく靡ホあり立ふれ。或ハ肱をうち砕れ。或ハ
手を負ひ。腰を折うれ。半死半生なるりの数十人。辛ーて悉ホ。群
ガ死。半の頭ホ低く。猛虎ホ向ふホ異なべ。舌を吐きをはたり孫。
阿容ーくと通ーるり。さる程ま大ホ利勇ハ事の甚を生て大きホ。

奴ら松壽を恨こて噛くと呟て。按司親雲上ゐ伝ゆ集合。こぞ器械をとりて正殿ゐ立出武藝ゐる里之子二十人。ものく半弓を取ぶして。左右ゐ侍ぶり。為朝奥ふく進こ入べ。乱箭ゐ射てそれとなく。その准侍大うとゐふ。松壽ハひとり苦くもひーかど正殿ゐ走り入て。利勇を練ていうりゐれゐ。為朝ハ蓋世の勇士なり。威をりてこれを制しかぶし國の大幸ハ人を殺ゐれゐまことゐ。然くハ親方。毎く剱伝解。弓箭を去ぶし辞を安寧はし礼儀をりて彼人を欺往ーまんぶし志うふぶハ福却禍の端となゐん。といりせもなんぞ。利勇忽地眼を睜を。汝いまゐ醒ぢや。かゐれ癖者伝吹挙して再び禍を惹出ゐぐゐ。者奴を捕捕人とハせど。ゐゐ吻伝動こそ奇怪なれり。霧だりもその非を志ふば。為朝が首級をとりて。これゐえせ縁。といてまき高く心づゐハ責れども。いまゐ戦栗ハ止ざりゐれかぶし行ゐ為朝ハ前後左右り。槍襖をはくりのけゐる。紀登之二三十人ゐ送ゐれゐぐゐ。悠くとして来ゐへハ。あれよく。とぞうゐ今まゐ勇ハ按司親雲上。里之子ゐ至るまで互ゐ面をあはして。惘然として。さる所を志ふぶ。利勇ハ亂ゐとうんせぐとて。豚ゐ似ゐれ声をふり立。東方の浮浪人既ゐ狗ゐ垂きながら。ゐゐ恥を志ふぶ。身のおゐ所なれすに。物ゐ行ふハいゐゐぞや。泄糞噌ぐ勇ありとも。これ又項王の威ゐふんや。縦鐵壁城ハ破るとも一言の約を破りかぶん。推ゐなり。と罵れハ。為朝呵ゐと冷笑ひ。怪有ゐることを怪くりのゐ。大臣今幼主を補佐し。信義をりて擾乱を結ばんとぐゐりのぶ。言を去端ゐよりて。義士を容れぐ。これ民ゐ泳り伝教ゐ行ゐゐぐゐや。夫辭嶽ハその行程近きゐあふぶ。加以山川の険阻あり。翅ゐくゐ

美女を惑して
利勇
為朝を
勸賞せ

翔も殆りがたし。為朝昨夜件の山を出れとしへども。路遠なれば今ふ及ぐり。
文ふ三日の約を違ふるにあらじ。且うけうる三箇條を悉くあ〜果らるふ。
いとぢふ日を数へて賞なれい人の切を棄ふ。これこそ〜といひけ
て。負うる櫃をおろしあへで。利勇ハいまぐ實るのとせど頭を左右へ打掉て
いへがたといふるりのうね。そふふ汐曚雲ふ乙を以て怪しふ櫃を負ふ
ふるふ疑ひ。そのどもその櫃をうち壊て検こんよと下知されい紀食之
ホ阿と回答て。金ふる槍を突拵へ一度ふ刺んと競ひかゝるをりのくしや。
と為朝ハ眼を瞪じえうりまふ。その勢ひふ碎易し衆皆尻居ふ撲地
とゆふと。利勇が左右ふ立うりふれ。按司應窪親雲上呂緑とく。武藝力
量のメえある上官二人袖うれめげて走りかゝり。蓋を開くんとふるひ忽地
ふ眼眩えて。りうとともに倒れうり。里之子ホハこれをえて二人の上官乃朝

ふ投伏られうりとやとひくん。利勇にあやまちなのゝせとて。金ふる弓ハ
弯めうふ蠢の孔ごとく射かくれども。乃朝の身ふうふ。散銭撒ふ
斜ことたゝ前ふ櫃を射うふせハ内ふ一声叫若と叫びて。ひとりの美人
輾ひ出うり只これ雲を出れ春の月ハ。梢の花ふ〜ほがごとく。まこと彼
宮城野の櫃の芳宜更ふ都ふ匂ふ
あれそいうふ。とだめうふ。直と呆れて目ハ細くしとえかうえれば按司
親雲上。筑登之里之子ホハ忽地器械を戛離と捨猛ふ髪を掻
拂て。ゆゞめれ官帽ハ押正し。膝を立顯を反ひ縦ふこえ横ふ打ふ
て。意彼首にめゝざはりのるし。此とれすでも陶松壽ハ黙然と
居うりれう忽地席を拍て為朝ふ。ふとこと向ひ喃ハ曹司時今播乱
の際ふ逼て。士民おのく〜鼬預狐疑を。この故ふ大臣かうゞしく人を

穴ぐらのわざかもすべし怪しみのあべうべし。さても何の故ありてこの女子を使ひ給ひしと問へば。為朝莞爾とうち咲て。この件のことは昔きてハ種々の来歴あり。某きのふ鞍山嶽ハ大鳥氏射て鷲巣山の麓ニ追ひゆき折ふし矢とおびくて二人の少年。必此ふくの衣を脱ぐとしとやとひろん。彼ハ遂ハ追敵の兵士と血戦して矢庭ニこれを刺留て折ふし矢とおびくて。

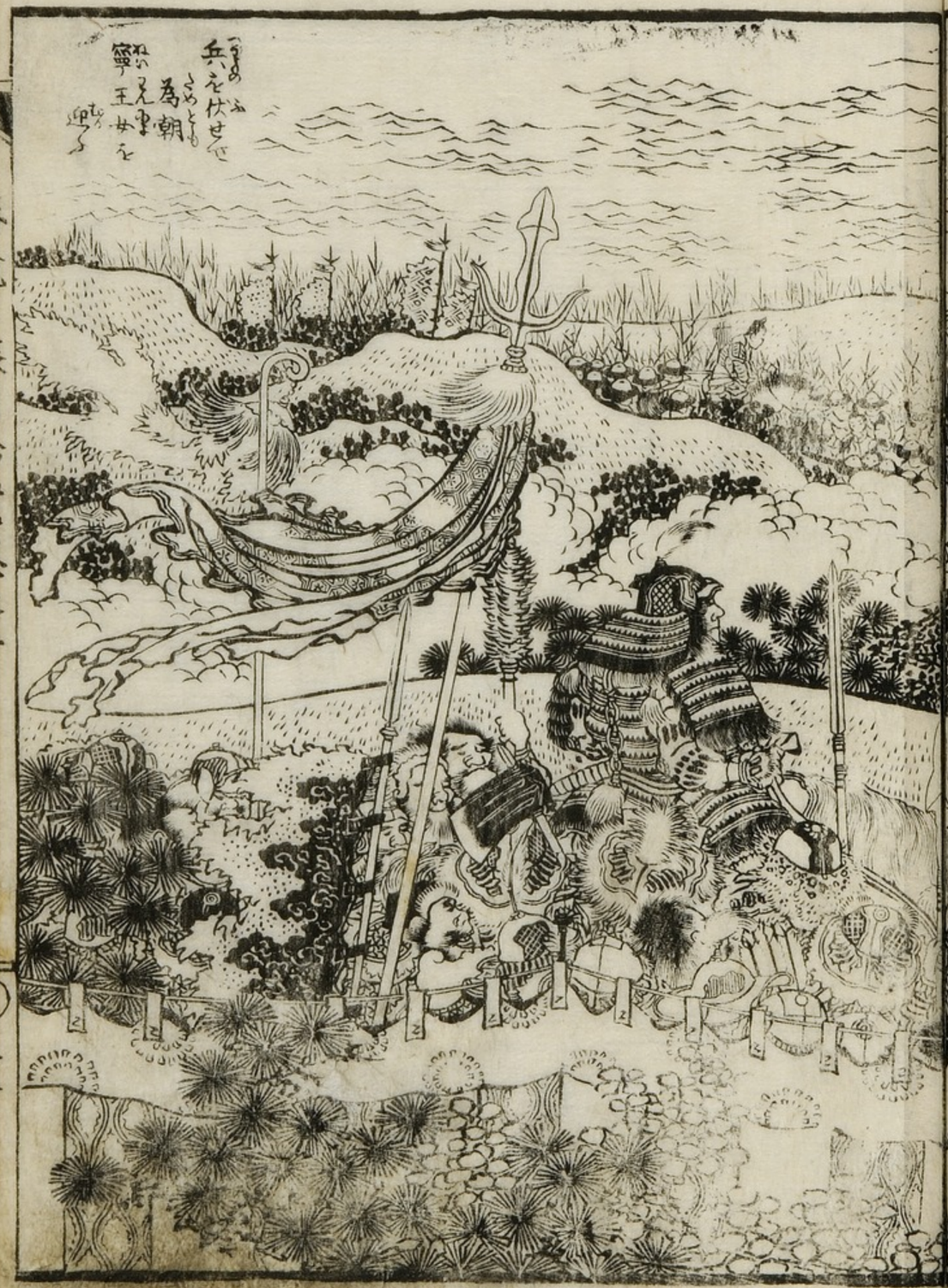
あらざれば。その哀傷を又捨がたくて。これさへ扨ありしを類りに日を数へて。城中へ入られを欲する所。今一トたび。大臣ふ見示して。猟の為体を告まうさんと思ふのこ絶て野心あるふのふに。これい許しまへし。と實事虚言うちまぜて。審ふ述給て。暫ひ櫃を引よして。三の頭をとり出し。松寿が傍へ指向の人ハ利勇ハ松壽が同輩と往ど遽く倚子を離れて。為朝ふ對して。眼ハ人をこに勝れて大きかりれど。才淺く智足らざれば真の豪傑と認ふに。幸ふ咎なふ邊ゞ拙きとうくれ少年ハ毛國得が子ども。誘惑と呼れて。これ仇とし寵ふりのく既ふ前夜。箇様ふこのありしをうれども。ふ精忠と君真物の憐このひて。そうふにもその秋さり。彼誘を生拘り松寿がすゝめふよりて如此ふにとうふハせ。ふその計策合期せど。曙雲ふ伏兵全廣ふ刼されて。つゞ腹心の兵士越豹李虎を失ひしが。今又多人で彼誘惑を亦曙雲が幻術ふて。假ふそのりのとえせられのこ實を彼ふ。赤瀬の碑のほとりふく生拘ふれしとえ首を刎られるに疑ひ。こふふにめてハ遠の武勇よりふく曙雲が詭計をそるつゞ欺び。これ一ッ加旃。美女海棠を使ひ。その寃苦を告ふしハ我ありに信ありその功賞せどいあるべうふに。抑つゞ身名家として。世ゝ高官を辱し。衣食満足りて如之ともそゞりしがいまざかれ笑人を又を虞舜を娥皇女英を辞せど。曹孟德の英雄ふ対も二嬌を銅雀ふ携乃ざる恨とせりつれ今この美女玖容ふとも勇ふ為朝あり智に松壽あれば曙雲が幻術も怕ふに足らに。寃ふ曹司ハ人中の龍海棠ハ亦女中の花なり。その龍も用ふるに志の花も愛そべし。倩惟ふ山南

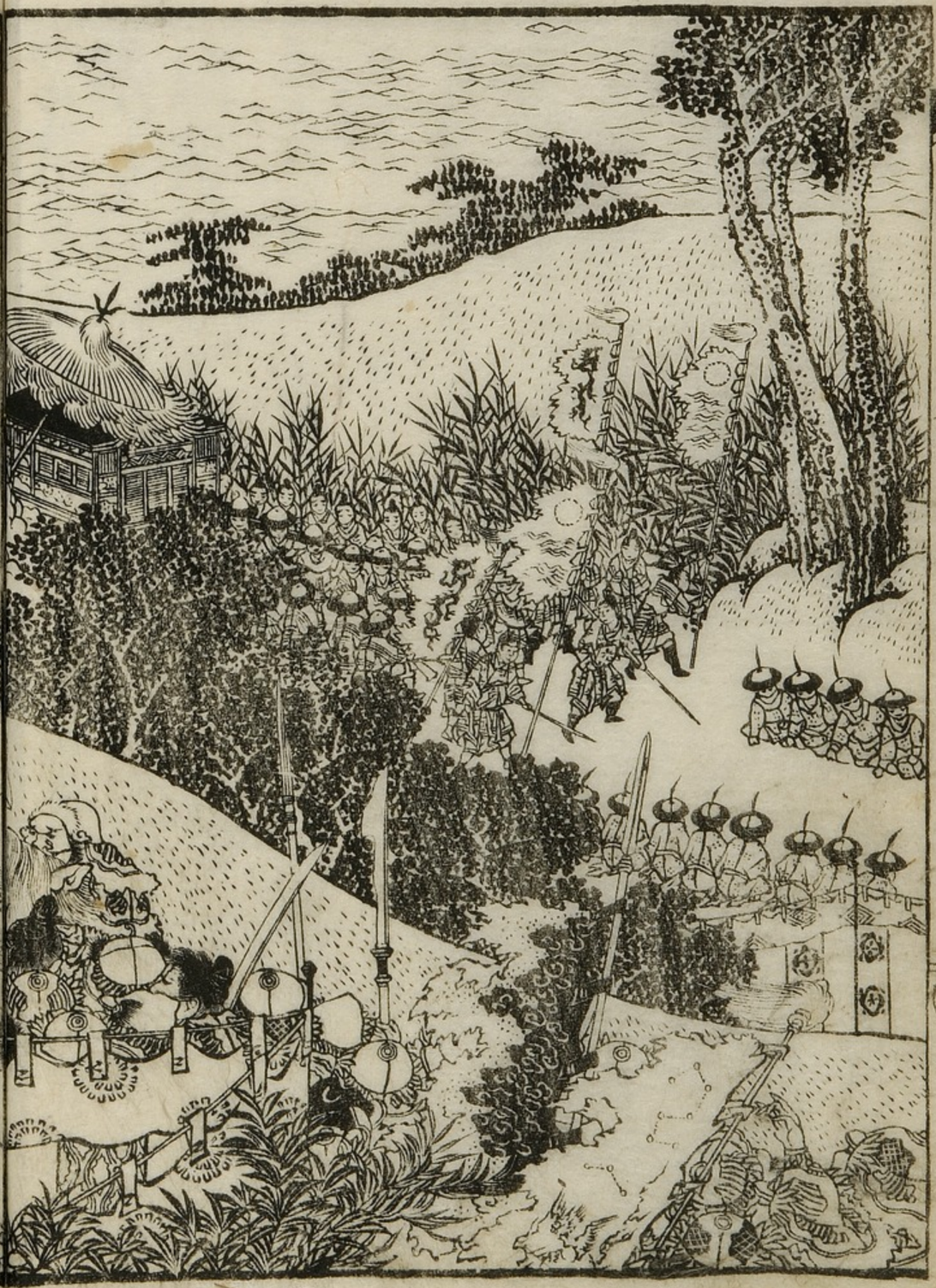
者なれ大里ハ南智念王城ゐ隣。北ハ首里にをつゞ防禦第一乃間切なり。今これ設びのめり。れ曹司を大里の按司ゝとゝべ。乎那原乎古田湧稲國より島袋高宮城ゐ至れまで十八ヶ処の屬村城管領し。二百騎ゝ將として大里の城をやゝ大功をたゆあゞ。こゝゐ満悦面ゐめゝゝれてゝの裏反を勸賞ゐ為朝ゐをうち掉さ。某させる績ゐし。今その女子れ故をとりて按司となゝんハ本来の情愿ゝあらゞと推辞ゐくべ。松壽遽ゝく小膝をさゝめれ曹司ゐゞてかくハ謙退ゐのゐ賢者ハ民を利して國おのづゝら富とゝゝり。大臣者その人ゝ招くゝ重く用ひゐゝるゐ。抑國の福なり。推辞ゐふとゝゝハと説諭せゞ。為朝亦宜ふゆゝ。ちゝゝばゝれゝ所望あり。大臣りゝゐゝ招さしゐゝ。大里をちゐゐゞ。ちゝれども輒くハ。聽ゐハゞと宜ふを利勇ゝけもゐ

どうち点既。何ゐまれいひゐくハ聽ゐゞし。聽ゐゞし。と回答ゝかは。為朝ちゞゐて領諾して按司の班ゐ入ゝく席を正し。某ゞ称ゞし。れハ寧王女のゐゐり。大臣國の為ゐ忠義と盡さんとゐゞ。寧王女を迎ゝく。大里の城ゐ册き入れゐべ。さゝらゞ為朝副ゐ軍となりて軍配せん。ちゝるとゝゝハ國民ゝゐ大臣の誠忠を稱贊して。曹警異を失ふゞ。と他ゐゐくも宜べハ利勇且く沈吟して。いゝゝ正理ゐれども。王女ハ曩ゐ王命ゐゝゝく。陶松壽ゐ称ゐれゐひねゐゐ。ゐ民存命ゐゝんや。そハ全く賢物ゐゝん。今迄往方を素ゝゐ。つゞ力及ゝと。諾ゐゝ称ゐ為朝ゐゝゐて。いゐそゐゐハ名易ゝれ某いねゐ日ちゐゞゞも小琉球の嶋北ゐて。寧王女の必死を救ひ。ゐゞて佳奇呂麻ゐ招てゝり。ゐゝく潛ゝ進ゞしゝり。大臣これを迎ゝゝと。ゐゝゞ。智勇のゐメえゐ大招ゝ。三百騎の逞兵を授て。彼島へ赴ゝゐ。

某亦伏兵となりて曙雲が賊兵を遮り留むべし。水陸既に計畧を合せたれば曙雲千里眼をりて。毎〻この事を志れといふとも。術あるべしかくのこいつぐるは疑〻くらうれん狡猾が妻白縫は志氣あるりのはして。その智勇をさくく丈夫に劣らぬ。惜うるいねる八月風清の難に係り。瀾を披いて水屑となりぬ。志うれるよりあるは怪しきに。白縫が魂いつの紅くよろ寧王女に憑りて。その心操を果さんとすれば。あや。動静云ふ彷彿として。つゞ妻に異ならぬ。こゝに一世の因縁を思へば。為朝少うりし時故あつて放せる狗をとの國に索うる。舊虬山の麓に。王女廉夫人に各告あり。玉と貂とを交易されるひ。これバそのとれつゞ多し蛇の珠に仇とをりそ。王女はふたゝび流離の者となりるふとはゞ亦憂とつゞ身のうえに比べて。昔を忍ぶ涙ありひ。いつも怪しき亡妻の恩愛に。よつて。必此

いふ。いつど首尾を箇様〻〻。もちもなく説きぶしりてつ言況用ひまつで。公私の幸これにまつ。偉氣をもつて宜へば松葉が小膝を礙と拍。大里按司為朝の宣ふ忠信恩義を失はぬ。王女と毛國判が傳子。といふ。曙雲が而為朝に王女存命のよし。怪むは堪えれども為朝の亡妻。その魂を憑れといへば。王女はして王女はあらぬ。烈女の志を奪ふ。これは後日の狡脱をかくさん。毎〻疑を決して使を遣し烈女の魂を迎へ。夫婦恩義を感じて國の為大臣の為に。為朝はふたゝびうもあらぬ。躊躇ふこと久しく。さゝ説くも利勇は尤も右回答はせず。先肚の裏あく。尋思しつゝ。これ今この海棠を容れて寵愛せば。衆人必ずこれを好むといふん。幾の門を塞んあり。この便宜ふ。王女と名のる女子なりて。為朝ふ妻にし。彼ふも美女を抱きるにまつ。よしや王女世ま


兵を仕せ
為朝
寧王女を



在りて。按司の妻なり。曚雲滅び。王子早世をとつふも。王女ハ王位ふ即ぐ。そのとれとれ。三首諸島を掌握して。中山王と申ふんふ。進ふこれを奪くりといふべた。もろもろ計校既ふ定りて。茫然と咲げる物の情ハ奪ひ。大里按司の亡妻白縫と申ふん王女よ。能着されとれハ王女ハ即その人の妻なり。速ふこれを迎ふりて。二世の心操を忘れぞれば松寿ハ二百餘騎をわく。五艘の軍船を浮べ。為朝ふ先ぐらて。佳奇呂麻ふ赴くべし。といそぐせば。為朝ハおりひの外なる事を。利勇ふ對し。白縫が魂。もぐし王女ふ憑ふことありとも。某ハ必ずび娶るの意なし。東方一帯ふの浮浪人として。ゆゑりなく國王の壻と申ふ王女を辱ずのこと申ふ。群小ふ妬ぐべ。このゆのこふ羨ぐと。宜ふ。利勇ハ絶く耳ふもかけず。事既ふ定りね。松寿ハ夜の中ふ進發せよ。

これハ阿公をりて。縁由を王子ふ伝へ。為朝ハ衣冠を整へ拜賀あるべ。と信ぐらて。女をら海棠が手を把て應雀呂緑里之子等ふ隨ー。青宮くとて入りふるれば。燭炉をころふなりね。

第五十二回

高樓ふ曚雲海氣を認て
大里ふ為朝王女を娶て

東風平の按司陶松寿ハ。その夜俄頃ふ軍兵の部ー。小禄の港ふ艤ー。次の日の順風ふ佳奇呂麻を投て漕ー。松寿ハ原来才智凡ふふぐれりのなれば。この時ぢくぐとふ。利勇ハ錦の袖ふ朴を拘のごとく。紙もなくて魚肉ふ飽き。人をちふぐれば。聖賢をこんても。これを吹るの類ぐ。されば為朝を。日本國の英雄なりとちふぐて。しめハ是用ひど。今又僅ふ。人を携ふるを貴美ー。忽地ふ按司とんく。

賢を招き士を用ゐといふべきや。遽莫為朝大里の按司となりたまふるゆゑ宮ゐ國の妻ゐして。王女の姫ぎみ。世ゐ出ゐ天孫子の餘德ゐり。賀をぞべーく。とひとりごち。おろゐふく飲びゐり。おれより先為朝ハ直ゐ衣冠を整ゐく。正殿の階下に跪踞ー。王子と拜ーもゐるゐ。王子ハ誕生のめでたいまぐ碁月あぐもるとざれべ。さるゐぐら木偶人ゐ異ゐふぐ阿公見を抱きて。高座ゐあり。即為朝を殿上ゐ召昇ー。大里の按司うるべて よし。亦王女を妻ーまふゐ旨を仰えちし。偏ゐ忠勤を抽て。曚雲弧うち滅さぞべーと仰ゲされかべ。為朝ハ恩を謝ーて退出ゐふゐ。諸按司親雲上ゐ駭然としてこれを目送ゐ。さても怪有るゐ。僥倖ゐゐと呟いてこれを羨ゐこれを妬むも又多ゐり。かくて行ゐ為朝ハ。詰朝筑登之佑二人を鄉道すとし。雑兵九人をゐゐりて。大里の城ゐ赴ゐ城中の士卒ゐ對而

して。ゐぐて十八ヶ村の村正ゐを呼集合。稅歛を落くし。法令ゐ正ーくし。まれるゐ賞し。叛くゐ罰ーまへべ。上ゐ枉れる俗吏ゐ。下ゐ僻る頑民なく。衆皆赤子の母を得るゐちちして。かくゐ良ゐの下風ゐ立んゐ。世ゐ有がくゐ洪福なりとて。いと憑ーゐ思ゐをゐせり。かくて幾三日ゐ及びて為朝ハ城中の軍兵を集合。嚮ゐ陶松壽が佳奇呂麻へ赴きより。倭れべくゐ。ゐりまん日も生をかふぐ。それ今夜子の刻ゐ。百五十騎を率ーて城を出。真和志の山蔭ゐ屯ーて松壽が帰るゐをまつべきぞ。さるゐ昨夜間者を遣ーて。彼処の地利を探聞ゐ。真和志。字平の間ゐ大河あれども。上ハ二股ゐとれて陸ゐ続く。その流れ海ゐ入り東のうゐ長川のほとりに高峯ゐり。これ兵を伏ーもるゐ究竟の要害ゐり。功ハ美ゐ。ちるゐゐり。ーー臆ーて敵を入て退くりのハ罪決ーて免ーがし。此旨

よくくこゝろゐるべしと。説示して。手部連ゐ定りしゑびその狩子の北及ゐ。主従百五十騎。密やゐ城を出て。和志の東北ゐ。饒波。長川の間樹ぢちゆゑに山蔭ゐ屯して。松寿ゑ王女ゐ倡して。ゆゑ多る代ゑに為朝忽地ゑひとりゆく。落亀ハ佳奇呂麻ゑ起きて。今ハ彼廷ゐめゝんぞゝん。り松寿にゑふれて。利勇ゐ告ゝ行ゝことあゝびその〻びハ殺ひゑし。とせんかくせんと。ゑひゝゑもゝひゝゑ。又ゝゝゝとゑひゝゑせば。松寿そゝゝ実ゐ利勇ゑ輔ゑりのゐめゝ。彼ゑ信ゐにりてゐゝとハ王子ゐ忠義と竭さん為歟。さふぶゝ別ゑ故あゝべし。前の夜落ゑ井ゐ為て。忽地擒とゐりしと。松寿ひとり利害を説てこれを助ゝりと。彼ゐ為ふ為ゝゝゝ防むゐ足ゝゝ。人の子とおりゐゐも。ゝゝ子舜天丸ハいゝゐなりゝん紀平治高間夫婦のゐも。世ゐなゝ人の数ゐや入りん。

妻子郎黨離散して。ゝれのゝゝゝに漂落し。今一城の主となれ。はしや功成名の遂ずとも。富貴を誰とともに受べゝ弓箭ゝ名を弓箭の為ゐ生涯を役せゝれ。小人利勇ゑ麾下に属して。ゝゝれよ世を移ゝ恩さよと過ゐしゐをおりひゐり猛きゝゝゐもゝゝゝゝて。薄命を歎ゝゐなれ。紫下某生再説陶松寿ゐハ順風ゐ為帆掛て。大洋数十里ゑ走り。次の日佳奇呂麻ゐ為船して。彼方あらちあゝりてゝゝゝゐ落ゐ人影もあゝざりまゝとかくしく巨木の虚ゐ老ゝる男女躲れ居ゝゝゝゝゝゝゝの老夫婦。おゝるゝく這出て。今朝ゝゝも大将の軍船。この為ゑ投て漕はしゝゝゝ為人ゐもゝゝて。ゝゝゝ怪ゝゝゝ疑ゝべゝゝゐゐゐね曚雲法王の軍兵なゝべゝて。衆皆慌忙て。山ゆゝく逃入りてゐひゝゝ。

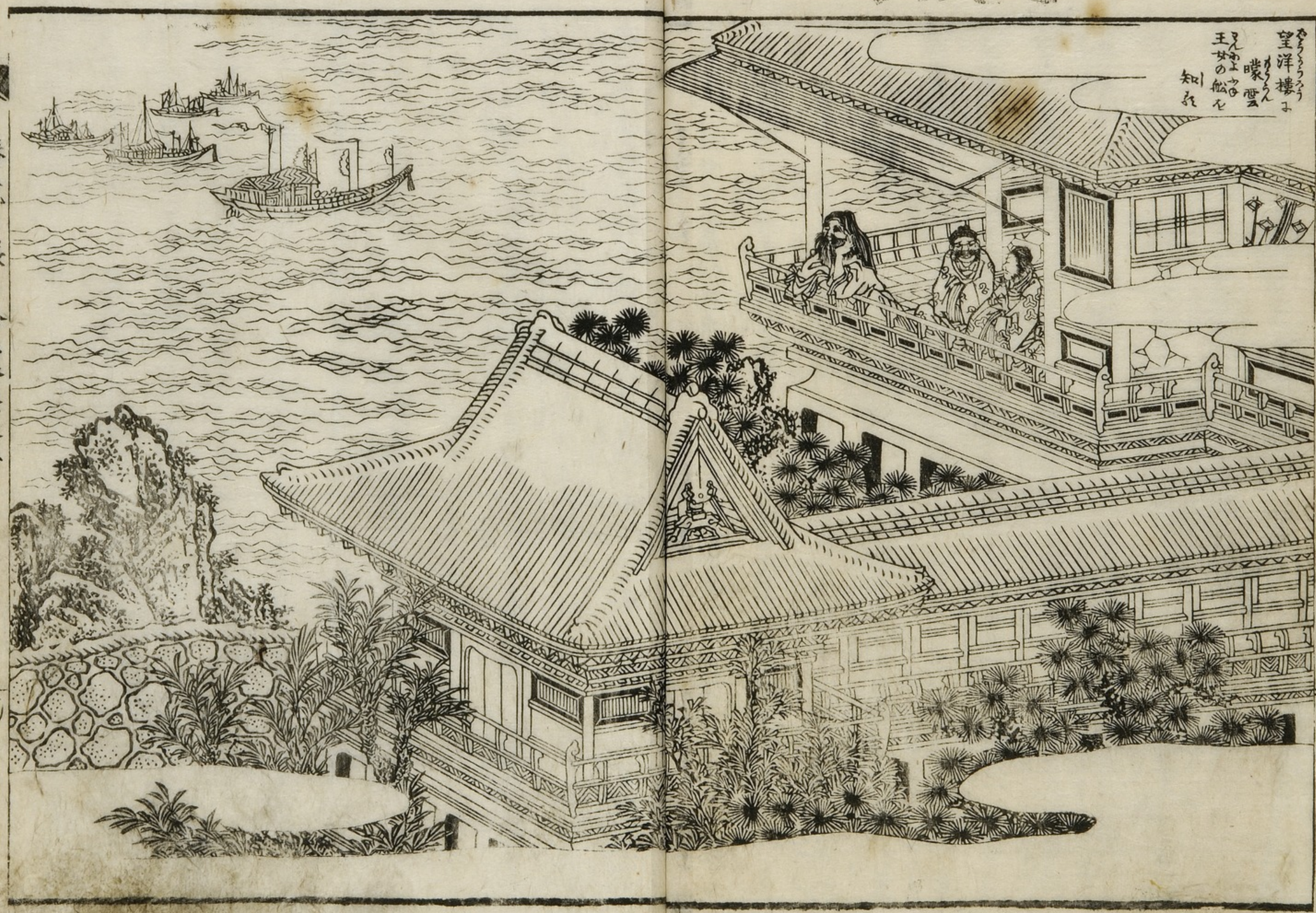
吾倘いまだ老られぬ。おのれまづ山に登ることもえうるまじかりけり。といふ。松壽いこれを笑てうち笑ひ。汝ホさん怕れなせそ。われ乃朝の所ホよりて。王子の仰をうけあり。寧王女を南風ホ。かくしこれをもんで乃ホまれり。按司陶松壽ホり。汝ホくやく爲長よ。このうち告よしとて。いと叮嚀ホ説諭ぜば。老夫婦ホく歎びて。おのく杖を携りつ。山路を投て走り去。一晌ありて此所へ。爲長林をまへとりて。ほつ。生下を山ホ。汝ホ此を突埋めて。數回松壽ホ拜とれば。松壽ハ長をちうく拝きて。爲朝を大里の按司ホ任ぜられうるの。且彼人のまうけよりて。王女ハこの語ホ在とよりをあらしを。松壽ハ松壽をもて迎とうしまふ。王子の仰を述大臣利勇の処分ホよりて。まれりと説ぎとれば。林をまへホふく歎びかくれるとハ。ホひろけど。遥ホその恥をえて。海の老弱婦女ぞ。ハハ曙雲ガ討手の兵ぞて出まホれ。り脱れるるやとて。衆皆山ホく躲て。ホ。王女ひとり騒ぎまうど。なでふさることやハある。そこホ彼軍船ハ。南風ホよりて。これを迎の使ぞ。れべしと宣ひ。るほ伝めとるれば。つりまく王女を脅負進ふせて。岩崖の中へ潜しまりひ。この老夫婦ガ。此ハ此くのよしを告ふ。活くれこちして。じめて王女の睿智を感じ。まつ王女をば長ガ家へ。ホ入れまりね。えくふ。あるべ。いひ果て。こる先ホ。こちて誘引ぐ。松寿ハ軍兵ガ。ホ方ホ陣とぐ。僅ホ十人の紙登之とおて。嶋長ガ。ホ。ホ赴ル。王女ホ拝渇して。為紅の。ホを告。王子の仰を述ホれば。王女ハ松寿と労ひて。或ハ歎び。或ハうち泣く。形ハ世のうばさをひを憤り。崩御ホ尚寧王廉夫人のホ。

狩毛國糾査國吉ホガ忠死のゆなどと問り。説もまちしまふ
こてハ。面新こて憔悴ま人。昔ホ家かりまつど。亦為朝の按司にあり
まふと欲び。狩衆天地がるゆかることて。うち歎たまふとて。越のいひ
ざゐるども。日本人めて。更ホ王女ハ似まつど。松寿ハこの所勢城ふく。
為朝の必此拙がるこ。偽なるざりけこと。嗟嘆して。信ゆふいひ
慰めゆふまとれ行ふ。長ハ海の老弱こそもに。鮮魚海藻ふ。
松寿ホと欲行し。みる欲びを述て。勇敢きるこりのるし。当下
王女ハ松寿ホ對ひて。ゆれハ為朝の故妻にしく。昔の王女ふあるど。
こてとりて海人ホ。白縫王女と称し。或ハ白縫姫と呼ぐり。抑うどゆ。
迹をこの海ホ痙ころよて。冊きさけうふれ少女二人あり。一人ゆ名ハ
ゆいぐとまれ。又一人ハみるまといふ。彼ホハ父もるく。母もなど。

いと惜きりのどもなれば。南風ホ人狩てゆんとおりふ。こゆるゆいふ
ゆべきと問ま人。松寿且く尋思ふれふ。ゆいぐれを丹頂はてこれ
語なり。みるまハ三曲ホして亀なり。さてハ語亀兄弟もホの出ゆふ
ありけて。と猜して莞尓とうらゆこ。海の少女ゆ南風ホ人狩てゆきこゆ
いんゆ。中かれべこハ思ひのこ深ど。大臣利勇ハ狐疑ふ。いまど
そのゆを告ぐして俱ゆまぐ。彼りのこゆ為ホ独の端となるべし。某海長
ホころ伺さし。別ホ心新をとりて大里の城へ送り遣こと。と回答ゆ。
王女も又松寿ゆ胸中を猜して。ゆこうびこれをいひ出まつど。ようく語
亀を海長ゆ家ふありとい人ども。松寿ホ對面せざりこれ。さて次の日
退風よりて松寿ハ王女を新ホ扶乗しまつど。その海の軍新ゆ海ホ
方濩して孫を遥ホ漕出せば海人ホ名残を惜こ。墓ひまるゆ。為朝

と別れしとなれば異なるべし。王女世の中ひろくなり給へば。沙曹司と言に。
朦雲を討滅し。白日青天をえせまくとぞ浦風さへ吹
おくりて。いとゞ良れいやすきたり。この時朦雲は。望洋樓に登りて。
遥ゐ海上をながめ給へば驚れつゝ。左右をかへりてうかゝ利勇
をうかゝぶに。漂客の壮士を招て。それがさくゐを聞ひ。王女を佳奇呂森
より呼びのぶして。件の猫ゐ妻せんとて。王女の私ハ今夜小禄の
港ゐ忍べしといふ。折ゐ一その席ゐ侍りしかれ。三司官棟廷耳
目官全廣縁由を学てうち驚れ。ちうゝぶ吾們軍兵をゐく彼処ゐ
赴ク王女を奪ひとるべしといへば。朦雲既をうち掉つゝ。亦且く打
眺て。呵ゝと冷笑ひ。彼壮士ハ智謀あり。王女をも獲とりのハ松茸
なれべし。ちうとなれハ。孤ゐ不虞の備あり。陸ゐハ数百の伏兵ゐん。

よゝや王女を奪ひとるとも。つゝぶ士卒を損ずべし。且王女ハ舊の王女ゐ
ちて。舊の王女ゐ。わゝぶ。これを奪ひとるといふとも。その益なきゐ似たり。
さるゐよりて。これ王女が佳奇呂森ゐ猫を猎しゝれど。討ゐの沙汰
ゐおよぶべきゐ。かゝるべきゐ。猫ゐ縁くちれば別ゐ奇計を設くるもの利勇
に自滅にして。後ゐ件の壮士と結ゐとゝぶし。ちうハあれど。利勇ゐ命数
いまゞ盡て。今より六七年の月日をおくゝば。つゝ謀成就せん。騒くゝ
かゝぶ。騒くべゝゝぶして汗さゝ。棟廷全廣感服して。法王の神機妙
算。今ゐ比めゝと稱賛て。さる行ゐ。王女ハ恙ゐ。小禄の港ゐ着船
ゐて南風丞の城ゐ入りのへば。為朝も又兵を纏めて大里へ帰りぬ
ゐけり。されば利勇を恭しく。王女を城中へ迎入るゝに。王女を利勇を
えて遠しく答れ。ゝゝゝ。ちを為朝が妻ゐ。白縫と呼ゝゝりのゐ付り。


望洋樓より
曚雲
王女の船を
知る

大臣の礼信礼をこそうりと回答ふ。おのいひざゐ琉球言語ふあらざれば。利勇ハ呆れて。まづ赤蕉舎ふ誘ひし。女房五七人ゑ册して。竊ふその為体を窺ふ。ようの俤ゑあらばげ王女ハ曩ふ松毒に秘まれしうるおぼふこれハ王女の亡魂ゞ。他婦ふ憑ゝるかゝんされば面和こそ王女ふ似られ。その人あらあらざりけり。志ろうとも。これ今この女を王女ふして。為朝ふ妻せるバ。世の人ゝ。これを我士と稱ん。ちろゆりく。と意の中ふ計校て。遂ふ松毒を疑ゞ。猶て黄道吉日と卜食して松毒ゑ。王女を大里の城へ送ゝ。婚姻のるゆをとり行ひるに。為朝ハ自ら再ゝ再四推辞まゝ。その脱ゞさければ。己ことを知ゞ。赤縄の繋れ所ふ住しまふ行ふ。夫婦の契浅ゝ。分てる境を含るゆ。いくて有一日。佳奇呂麻の嶋長ゞ。落魂と小私ふ乗して。潛ふ大里へ送ゝ。

うゞ。為朝これを喜び入れて。えと身ゞ忠孝を賞嘆し。嶋長ふ物駄ちゝして。佳奇呂麻へ送ゝ。松毒ゞ志の。これふ善と嘆ゝ。嶋魂をふゝ潛して。城外へ出しゝ。

第五十三回

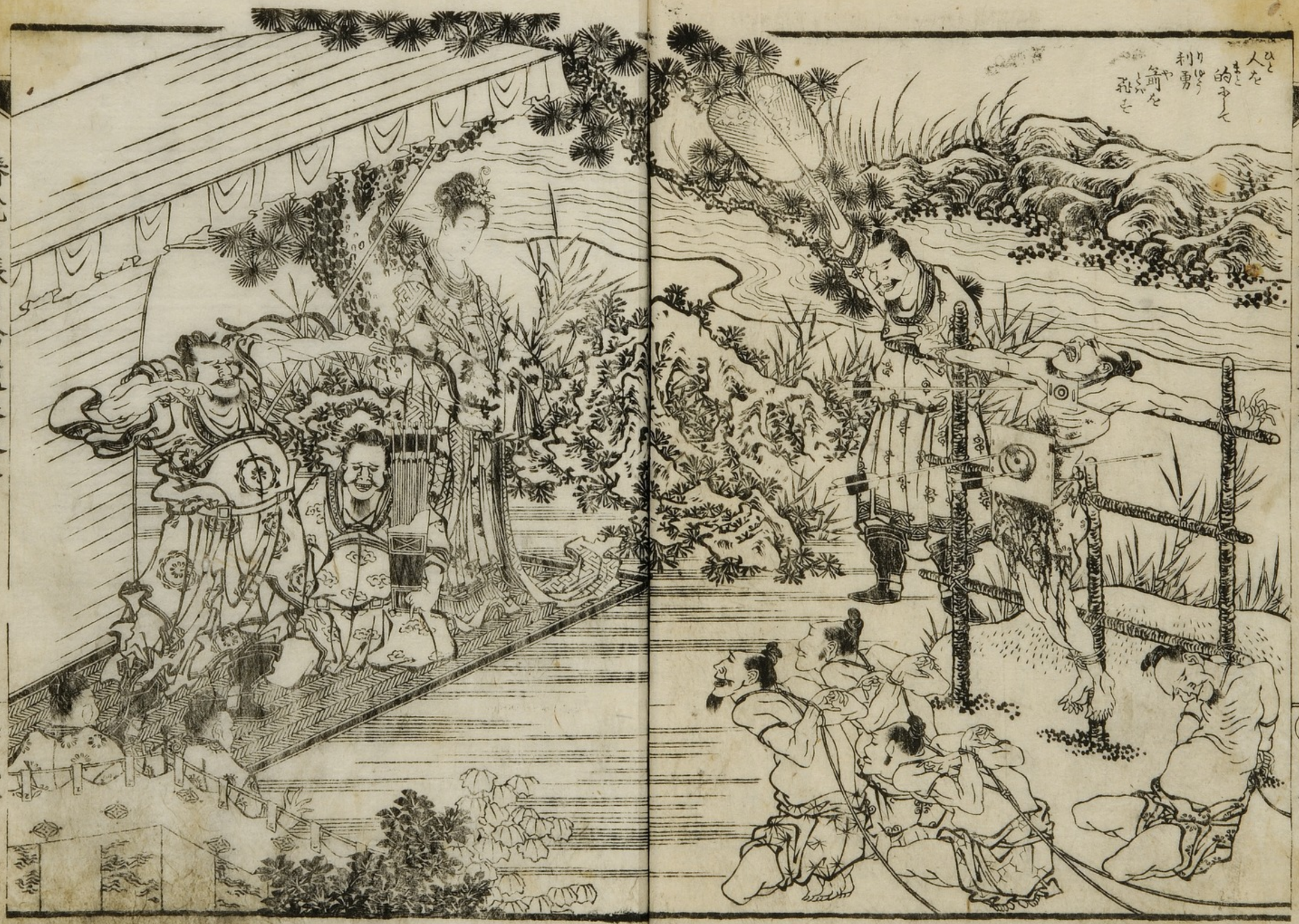
人を的ふして利勇強弓ふ誇れ
馬ゑ乗して松毒危窮を告ぐ

今茲も既ふ暮て。ゆゝ玉のとし立かゝり。世ハ安ゝに暖なれども。人のこゝろハ長閑なゝ。為朝ハ。曙雲ゑ討滅さんゝふ。りのゝ人馬を調練し。民ふ教ゝふ仁義を以し。賞罰法令に。當ゝ。ことゝ。ゝ。士卒おのゝ。その職をゝり。軍民おのゝ。その業ゑ。ゝ。徳ふ化せゞとゝふ。白縫王女。亦頗婦徳ゝり。自ら蚕養して。機織を勧ゝ。大里十八処の属村。ゝ。治りぬ。

これあハこうえて。南風原の城あハ。大臣利勇。驕ほしゐまゝなるをあ。美女海棠を引くゝ。これを鍾愛し酒宴を奥ふ。長夜日もすほ飽ぎとて。これふ続ぐふ燭をりてし。絃歌の声絶る隙なれど。松壽へ傍痛くおぼえて。ちゞくこれを諫れども。愛でうも用ひず。曚雲久しく境を犯さゞれいつゞ武威を怕るゝのゝ。萬世の功名も生前一杯の酒ふハ及ばゝ。この時ふ楽ぶへ老て命終るの日悔もいゝぞ及ぶべき。これ幼主を補佐して摂政ふ私なく。民の為ふ疲労ゝり。かゞうの保養をゝんゆるぶし。と同答して諍憚ら守るゝ。抜真の為ふ民を虐て。租税を重くし。非法のこをゝうしかゞ。軍民ほをく恨を含うて。密に大里へ志ゆせんとゝるもれど。流石ふ利勇ゞ威勢に憚て。氣をあらんせゞ。されど利勇ハ民の歎訴をかゝりこゞして。これふ涓ふを賞し。諫ゝを罰し。只恣寵呂緑ゞ徒同氣相求る安人ふを重く用ひて。歌楽を恣ゆし。その傲慢。季氏ゞ八佾ふもるて。さるゞゝ國王の拒びふ異ゝるふゞ。ゝゝして去ゝ年の春秋ゆ。ゝをとゞ。為朝頻ふ上啓して。人馬肥兵糧備あり。郎刀を賜りて。曚雲を討べし。と請ゝるゝも利勇ゝれを可とせゞゞ。夫兵ハ凶器ゝり。民の希ふ所ふあらゞ。り。勲ふ首里を攻て。その軍利ゝらゞハ毛を吹疵を求るなり。只固く守て兵ゝを強くし。居ゝゝ武威ゆ張れふちゞとて聽さ給ゞ。為朝ハ只歯を切り。徒ふ月日をるゝ。たまひり。松壽ハ是彼の形勢をゝて。禍ゝゞゞ才ふ及んゝをおそれて。東風平へ及らんとのこゝゝひゝゝゞ。竊ふ腹心の郎當に。謀汁を授城中ふ流言と。かゝて。誰いふもなく。東風平の軍民ふ按司の久しく南風原ふ

あるを見て野心を起し。城を焼て曙雲に降示せんとて。暫くとして風声もうしうば。利勇ハとれを伺ひて大きふ驚て。松寿を呼ていふやう。四邊久しく。この処ふあるとりて。東風平の軍民ハ敵ふ内應ものと。ひそかに彼地ふ立入りて。緤反の徒と捕捕り。固く城をもりて。かつくしく出仕せぐうふぐと。命ずるに。松寿ハ心ずるふれで。欣然として領掌し。即日東風平の城へ立入り。その後ハ絶て南風原へ出仕せず。利勇ハ松寿が傍ふなれば。ようくふ後ゆとき心持して。只彼海棠と翠帳の下に招び戯れ。酒ふ暮らしを。ふあらして。月日の代謝をおぼえず。こゝに五六年ものとしにまれで。為朝頻ふ焦燥て。亦大里より上啓して。首里を攻んとて紙帛請の人で。利勇ハその素啓を見て冷笑ひ。さらばまづ。これみづから人馬を調練

あるとて弓勢のほどをあらはせんとて貢米未進の農民ふを捕らいさく弓場殿ふ縛てこれを的とし。矢庭ふ射殺して楽とす。その暴悪桀紂ふ異ならぬ行ハ。心ある人ハ。ふなれども。こゝ爪弾して。大臣ハ禍獣よりもおそれと呟くを。海棠ハ。やくあらてその譏るものを生るにより。利勇ハ亦譏るものを摘捕ら。新刀を試さと稱して。手ずからこれを斬ぬ。されば罪なくて命を隕すとりのこゝろ。かくて利勇ハ有一日海棠とともに城の樓ふ登りて。遥ふ人の往来をみるふ海棠ハ。ひとりこれを見て。潸然と泣ふれば。利勇驚て。その故を問ふ海棠ハいとうち泣さ大臣妾が母ふ。ひとりあんとなるべ。まづ左右の人を遠ざけ。人しといふ。ふ応じて女房里之子ふを退け。ぬぐひ。こゝ。これを問ハ海棠とせやうやくに涙をおさえ大臣ハ。よろづふ賢くとうせども。眉ふ火の気


人を的にして
利勇
箭を飛ばす

患あるをきりまつと。為朝久しく大里の城をきりて民のこゝろ汐紙
ゝりされば曙雲を討と稱して時く人馬を淵煉。東風平なる松寿と
計を牒あしして大ほとうしまひまあふせんとあれ腐せこの城下代
往来をるりのも大里のうへゆくへ多くこるこへまるハ稀まり加之
王女の為紀よ適りまひてより人こるこれを駙馬と稱そその威權
をさく大ほに苏らねを留用ふえまふいうめぞやかゝてハ終る彼
ホが為ふ醯よせふれまふべしと思人ハ悲しく朽をく禁めるる袖
の雨。それぬもひをきりまくと言家ふ巧ふ喞めど利勇ハはゝぐとく
果て。大息つゝ寔ふ思ひあゝ終ことあり。只速ふ應窪呂緑を大将と
きて。數の軍兵を指向大里東風ホの両城を攻落して為朝松寿が
首級をうんさんとてゆゞてきんとるを。海棠ハその袂代引とゞ兒。

為朝が勇。松寿が智ハをる見人のきる所。應窪呂緑ハその敵多ふ
あふぶ。り大里を攻るとたハ。東風平より まり敵ひ。東風平弱くん。
大里より まり援ん内乱既ふ起りて。曙雲その虚ふ乗ゝぶ。遂ふ両
ゝ防ぐふ術なるべし。只詭て為朝松寿を呼びよ力士ふ仰て
摘捕らしまふ。刃に衅ゞして。両虎を獲まふべし。さハ仕ふゞゝや。と
密語ぶ。利勇ハ喜ぶと拍く。大よふ数び。寔ふ為ん分を両全の
少女ゝ。この計畧究てよし。王子ハ今茲六才ふなり多くハ着袴ある
ゞしと令きゝさん。この拜賀ふハ洩ることなく。為朝松寿もつゞ弥
ふ入ゝべし。きゝまりく。とやうやくふ仏もちかて。やゞて應窪呂緑ホ
を呼集合。件の密計を説きゝして。今月某の日王子着袴の拜賀
とて。諸按司系内ゝゝべしとぞ令きりけれさる程ふ為紀ハこの年

ぞ来ることもなく。月日をおくりまうふう。終は功名の志かなへを憎り
まうふ。白雉王女ハ。舜天丸の。往方いうゆと。ゆくへ。世ふあふがこの
春ハ。年ハ十二ふりのゆべ。ふこの世あの世とうくことなれ。うゐ。三の鬼
神。夷あるりのハ八重山の。霞の外もちるとゝ人ど。うほ知りがうてうぶ子
の存亡。子故の闇の闇。ゆハ。ゆくしの雲の霧ぬ。とかれは。説ふ。祈
うふ。忽地南風ふりのもん使と。構して。國書院の官人拝賀のゆを
告まうれば。為朝ゝを衣冠を整出迎てこれをうけあうれふ。件の官人
そ。従者をいとがしほく。亦東風平へとて。走去ぬ。かくてその夜更蘭
て。頻ふ大里の城門を敲くものあり。門をちる兵ホかうぐしくこれを
入れば。まづ按司ふまうしてこそて。泣ーかべ。為朝ハうゆの遊ぶきゝて。
こぶうふ物見の窓よりえまうふ。陶松寿ぐ只一騎。ゆ。ぶて東風平
より来れるなり。怪とみぐふ城中へ迎入れ。まづ燭を秉く。閑室
に誘ひ。その故を問へば。松寿ハほとり近く膝をそゝ。其少夜
深てまゐるゆ。火急の一大事と告まうさん為なり。といひも果ぬ。
こゑ声高ゝと為朝ハ翁を揚て。推禁ぬ。後方と結とえかくりゆ。
一室隔て漏刻の刃。之告れ。昔ゝのゆ。畢竟松寿ぐゝに来つゝ。
いうなれ故ぞ。次の巻ぬ読ゆて。ちふん。

椿説弓張月拾遺巻之三畢

拾冊

極樂寺